

令和元年6月22日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04263

研究課題名(和文) パトスの知に基づく人間学の創成 啓蒙理性批判と受苦的経験に関する思想史的研究

研究課題名(英文) Philosophical Anthropology based on the Knowledge of Pathos

研究代表者

小野 文生 (Ono, Fumio)

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：50437175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、啓蒙理性批判の哲学的アクチュアリティの考察、受苦的経験をめぐるユダヤ思想の精神的遺産の考察、カタストロフィ経験(水俣病、ハンセン病など)に関する思想的蓄積の検討、現代思想における潜勢力、形なきもの、無力さ・弱さの思考に関する分析という4つの研究軸にしたがって進められた。人間の生が本来はらむ「もろさ」「無力さ」「弱さ」など受苦的契機(パトス)に着目し、「パテイ・マトス」(受苦を通して学ぶ)という知の系譜が有しうる固有の意義を論じ、「パトスの知に基づく人間学」の構想に向けた方向性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人間の生が本来はらんでいる「もろさ」「無力さ」「弱さ」など受苦的契機(パトス)は不当に低い評価を受け、避けられるべきものと思われがちである。しかし、本研究は、このパトスの要素を正当に意義づけようと試みるものである。古代ギリシア以来の「パテイ・マトス」(受苦を通して学ぶ)という知の系譜は、あらかじめ先取りされた確実性に方向づけられる学知(ある種の自然科学や官僚制の原理)とは別の、固有の意義を持っている。この視座は、世界で生じている破局的できごと、生老病死に苦悩する人間の問題を考えるうえで、哲学、人間学、教育学、宗教学、医学など広い社会領域・学問領域にまたがる共通の問題に示唆を与える。

研究成果の概要(英文)：This research project has 4 parts: (1) an inquiry into the philosophical actuality of the critique of enlightenment and reason, (2) an investigation into the philosophical heritage of Jewish thought about suffering, (3) a consideration of the thought of catastrophic experience (Minamata disease, Hansen's disease etc.), and (4) an analysis of the concept of potentiality, and the philosophical elements of weakness and fragility in contemporary thought. Focusing on the moment of "pathos" such as fragility, weakness, and helplessness of human life, this research project treated the particular significance of traditional thought of "pathei mathos," or learning through suffering, and basically proposed the conception of philosophical anthropology based on the knowledge of pathos.

研究分野：社会科学

キーワード：パトスの知 受苦 啓蒙批判 水俣病 ハンセン病 カタストロフィ ユダヤ 人間学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 教育思想・教育哲学における学術的課題の背景

近代教育学の成立以降、教育システムと教育技術の発展のなかで、教育方法の一般化やマニュアル化、人間の経験を理解するための科学的・合理的な手法の追求の努力がなされてきた。しかし皮肉なことにも、その精緻化の過程で、方法化・操作化・合理的把握の難しい対象人間の経験に付随する「不可視なもの」「偶然的なもの」「冗長的なもの」などがややもすると排除されていった。最近の教育改革をめぐる動向においても、そこで想定される教育の学知は、実証科学的に説明可能なもの、evidence-basedなものへ縮減されつつあり、特定の有用性のみを依拠する機能主義が教育現実を覆いつつある。それに伴い、即効性、機能性、操作可能性、evidence-based、汎用性等の概念によって、教育的日常の実践やその礎となる教育思想が徐々に塗り替えられてゆく可能性がある。そうした動向に対し、「人間の『経験』(「通過に伴う試練・受苦」の語源をもつ experience, Erfahrung) が本来含むはずの不確実性、偶然性、冗長性、受苦性などを教育の学知はいかにして掬い取ることができるのか」という課題が浮上している。教育思想研究・教育哲学の最重要課題の一つとして、そうした不確実性、冗長性、受苦性がいかなる意義をもちうるのかを原理的・哲学的に把握し、不確実性や冗長性、受苦性など人間の経験や生の強度に礎をもつ教育思想を立ち上げていくという課題が挙げられる。

#### (2) 現代社会の課題との接点

ところで、上述した教育思想の学術的課題は、現代社会の課題と根底で接点を有している。とりわけ、東日本大震災・原発事故を契機に現代社会の文明論的な行きづまりが指摘され、3.11以降の世界における教育思想はいかにあるべきかが真剣に問われねばならない今日にあっては、合理主義的・機能主義的原理には還元不可能な「人間の生の強度」を十全に掬いあげ、その生の強度に即した人間と社会と倫理の関係について根本的に再考する必要性が求められている。これは教育学にとって最重要課題の一つである。震災や原発事故、水俣病、ハンセン病などのカストロフィにおいては、結局、被害「認定」と金銭的補償において決着が見出される。たとえば水俣病患者認定制度は、多くの未認定患者や「潜在的」患者を取りこぼしているが、認定如何にかかわらず彼らの受苦(パトス)は「存在」している。にもかかわらず、認定されない限り公的には「無」とされる。このような「存在しながら認定の外部にとどめおかれる残りもの」としての受苦的経験はどのように公的世界に現われうるのか、「受苦的経験の特異性はいかにして認識可能になるのか」という問いが課題として浮上している(同様の課題は、20世紀最大のカストロフィの一つ、ホロコースト/ショアをめぐるでも顕現している)。

換言すれば、カストロフィの経験は、今日のわれわれに対して社会システムの構成原理としての技術的合理性に基づく「啓蒙理性」の行きづまりについて、および受難的できごとの際して、あるいは人間が生きるうえでこうむりうる受苦的経験の問題について、なお深い省察と哲学的思索をすべく迫っている。

### 2. 研究の目的

上述の教育学の課題と現代社会の課題に共通する特徴として、以下の3つの傾向を指摘しうる。

- ・ 確実な知や操作可能性等へ過度に依拠し、システムから冗長性や不確実な知を排除する傾向
- ・ 見えないもの、形なきもの、現われないものを「存在しないもの」とみなす傾向
- ・ 人間の生のパトスの側面、すなわち受動性や受苦的経験の「意味」をないがしろにする傾向

このような傾向を有する問題状況に対し、その打開策を見いだすのは決して容易ではないが、本研究は思想史的アプローチによって次のような3つの研究課題を設定し、打開のための基礎的方向性を示すことを試みる。

- ・ 機能主義を下支えする技術的合理性 = 「啓蒙理性」の限界に対して批判的考察をおこなう。
- ・ 形なきもの・現われないものの存在様態を「形なきものの形態学」として思想史的に考察するとともに、現われることなき「潜勢力の思考」(アガンベン)についての哲学的アクチュアリティを検討する。

- ・ 様々なカストロフィと受苦的経験に関する思想の蓄積を省察し、人間の経験が本来はらむ偶然性、冗長性、受苦性について、その固有の意義を哲学的に把握する。

これら3つの課題に迫るために、以下の4つの思想フィールドを研究軸として設定する。

(1) 啓蒙理性に対する批判的考察の系譜を辿り、その思想的アクチュアリティを考察する(広義のフランクフルト学派、ヴェーバーの官僚制研究、イリイチのコモンズ思想などの検討を通して、パトスを馴致する啓蒙理性への批判の現代的到達点を測定する)。

(2) 受苦的経験をめぐるユダヤ思想の精神的遺産をパトスの知という観点から省察する(レヴィナスの絶対的受動性/知と経験、ヨブ記、ホロコースト/ショアについてのユダヤ人の思想、ヴィーゼル、アンダース、ショーレム、ヨナス、ツェランなど)。

(3) カストロフィ経験(水俣、ハンセン病、戦争)に関する思想的蓄積の検討および聞き取り調査(石牟礼道子の「悶え加勢/もうひとつのこの世、緒方正人の「チツソは私だった」、鶴見俊輔の「方法としてのアナキズム」、小田実の「難死の思想」などカストロフィに対峙するパトスの思想の検討。水俣病患者・ハンセン病の(元)患者/支援者らの聞き取り調査)。

(4) 現代思想における潜勢力、形なきものの形態学、無力/弱さに関する哲学的動向を分析する(アガンベンの非の潜勢力/悲劇の知恵/アウシュヴィッツの残りもの、アーレントの

現われの政治 / 許しと約束、ブーバーの我と汝 / ゲシュタルト、ユダヤ神秘主義とシンボル理論、ヴァッティモの弱い思考など)。

以上、4つの研究軸に個別に考察を加えたうえで、本研究はさらにこれらを人間の生の基底をかたちづくる「パトスの知」の思想として統合的に把握し、それを「パトスの知に基づく人間学」として構想することで、教育思想 / 研究に対する新たな寄与を果たすことを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、啓蒙理性批判と受苦的経験に関する思想的考察を通じて「パトスの知に基づく人間学」を創成するというテーマ設定のもとで、(1) 啓蒙理性批判の思想的アクチュアリティを考察する、(2) 受苦的経験をめぐるユダヤ思想の精神的遺産をパトスの知という観点から省察する、(3) カタストロフィ経験に関する思想的蓄積の検討および聞き取り調査をおこなう、(4) 現代思想における潜勢力 / 形なきものの形態学 / 無力さ・弱さの思考に関する哲学的動向を分析するという4つの研究機軸を作り、相互に関連させながら思想史研究の方法によって遂行する。海外での史資料・文献の調査と収集、史資料・文献の読解と分析、国内外の学会での成果発表などを通じた学術的知見の交換や討議、カタストロフィ経験に関するフィールド調査(水俣病 / ハンセン病)などが研究方法の柱となる。これらを通じて、パトスの知に裏打ちされた教育思想の新たなパラダイム創出に、一定の視座を提供する。

### 4. 研究成果

2015年は初年度にあたるため、設定した4つの研究軸それぞれにおいて基礎文献・資料の収集と理論状況の把握に努め、またフィールドの予備調査をおこなうことで、研究全体の基盤と方向性をつくることを課題とした。(1) 「啓蒙理性批判の哲学的アクチュアリティ」については『啓蒙の弁証法』『否定弁証法』の読解を進め、フランクフルト学派に焦点を絞って文献の収集・分析を進めた。(2) 「受苦的経験をめぐるユダヤ思想」についてはショア関連文献の調査と分析、とくに「赦しの思想」について調べた。(3) 「カタストロフィ経験」については水俣病の思想(石牟礼道子、緒方正人、原田正純ら)の言説分析をおこなった。(4) 「現代思想における潜勢力 / 形態学 / 弱さの思考」についてはアガンベンの「非の潜勢力」の哲学、アーレントの「現われ」の思想をとりあげ、読解と分析を進めた。上記の関連文献・資料を収集するため、ドイツおよびイスラエルで資料調査をおこなった。また、イスラエルで開催されたマルティン・ブーバー没後50周年記念国際会議にて講演をするとともに司会を務めた。そのなかで、参加者らと本研究テーマに関して有益な意見交換をすることができた。また、国内のフィールド調査として、水俣病センター相思社、および長島愛生園(神谷文庫 / 愛生園歴史館)にて資料調査をし、患者・元患者 / 支援者の受苦的経験に関する予備調査をおこなうことができた。これらの成果の一部を、上述の国際会議、および京都ユダヤ思想学会や教育哲学会などで発表した。また、水俣病センター相思社刊の報告書『三人委員会水俣哲学塾』や『週刊読書人』紙上対談(「シリーズ戦後70年第4弾: 哲学者はショアといかに向き合ったか アウシュヴィッツ収容所解放70周年」)などにこの研究を活かすことができた。

2年目にあたる2016年度は、初年度に行った研究の成果を踏まえつつ、ひきつづき4つの研究基軸に沿って研究を遂行した。(1) については、フランクフルト学派における啓蒙理性批判の成果を検討するために、ドイツ・フランクフルト大学にて資料・文献収集をおこなった。また、フランクフルト大学のクリスティアン・ヴィーゼ教授と意見交換をおこなった。さらに、マックス・ヴェーバーの官僚制研究に関する分析をおこなった。(2) については、レヴィナス、ブーバーの思想分析のほか、ショア関連の文献の読解を進めた。(3) については、水俣病をめぐる言説分析と資料調査、現地での患者さんや支援者の方々からの聞き取りほかフィールド調査を継続した。また、多摩全生園においてハンセン病をめぐる資料調査をおこなった。(4) については、アガンベンの「非の潜勢力」にかんする思想の読解、鶴見俊輔のアナキズム思想およびハンセン病へのコミットメントについての調査、「受苦」や「弱さ」の思想に関する関連文献の調査と収集をおこなった。これらの成果の一部を、ドイツでの招聘講義、教育哲学会や公開研究会などの機会に発表することができた。また、『京都ユダヤ思想』のブーバー没後50周年記念論文や『災害と厄災の記憶を伝える』(山名淳・矢野智司編、勁草書房)における拙論などに反映させることができた。

3年目にあたる2017年度は、昨年度に行った研究成果を踏まえつつ、また最終年度での総括を意識しつつ、ひきつづき4つの研究軸にそって研究を遂行した。(1) については、ホルクハイマー、アドルノ、ハーバーマスを中心としたフランクフルト学派やU・ベックらの啓蒙理性をめぐる理論の検討、および技術的合理性をめぐる思想群のリサーチを行った。(2) についてはブーバー、レヴィナス、アーレント、アンダース、ヨナスほか アウシュヴィッツ以後の思想の調査・分析を進めた。(3) については、水俣病センター相思社での調査、石牟礼道子文学ほか 水俣病思想のリサーチ、熊本・菊池恵楓園ほか関連施設での調査、鶴見俊輔のハンセン病への取り組みの分析などを行った。(4) については、アガンベンの思想分析のほか、水俣病言説、ハンセン病言説など病や受苦的経験をめぐる言説にみられる「弱さ」「無力さ」の契機を読み解いた。以上の調査および読解・分析は引き続き次年度以降も継続する予定である。なお、これらの研究の成果の一部を、教育思想史学会のシンポジウムや教育哲学会のラウンドテーブル、シェリング協会の研究例会、教職課程研究関連の研究会などで発表した。また、国

際哲学雑誌、ドイツの学術図書、教育学テキスト、事典、児童教育雑誌、新聞など様々な媒体で本研究の成果の一部を公表することができた。

最終年度となる2018年度も、(1)啓蒙理性批判の哲学的アクチュアリティの考察、(2)受苦の経験をめぐるユダヤ思想の精神的遺産の考察、(3)カタストロフィ経験(水俣病、ハンセン病など)に関する思想的蓄積の検討、(4)現代思想における潜勢力、形なきものの形態学、無力さ・弱さの思考に関する分析という4つの研究軸それぞれにしたがって研究を進めた。(1)ではアドルノ、ハーバーマス、アーレントなどの思想を検討しながら官僚制、技術的合理性に対する批判的論点の特徴を明らかにした。(2)ではブーバー、レヴィナスらの思想的検討のほか、ショアー(ホロコースト)をめぐる記憶論の検討を進めた。(3)では引き続き水俣病、ハンセン病関連のフィールドワークをおこない、数々の問題や課題の所在を明らかにしつつ、啓蒙をめぐる両義的な意義や受苦の経験の表現論という観点から思索した。(4)ではブーバー、ジンメルなどの「形」をめぐる思想の検討、美と「形なきものの形」をめぐる思想的検討、アガンベンの「非の潜勢力」、鶴見俊輔の「もろさ」や「マチガイ主義」に基づくプラグマティズムの検討などをおこなった。これらの成果を踏まえながら総括し、得られた知見をいくつかの思想的要素のもとで統合することを試みた。「もろさ」「無力さ」「弱さ」などパトスの契機から導かれる知の原理的省察をおこない、科学とは区別される「パティ・マトス」(受苦を通して学ぶ)という知の系譜が有しうる固有の意義を、人間学や教育学のうちで、そして広く現代社会のなかで賦活させるという課題を提起した。そのことをとおして、「パトスの知に基づく人間学」の構想に向けた方向性を示した。それらの成果の一部を教育学、哲学、ユダヤ学など関連する国内外の学会において発表し、あるいは論文や書籍、記事として公刊した。本研究のテーマは射程が広く、論ずべき課題も多い。今後は、これらの成果やこの研究を通して得られた知見/データ/洞察/インスピレーションをもとにしながら、パトスの知に基づく学知や社会原理の構想へ向けてさらに研究を進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計6件)

Ono, Fumio, An Exegesis of "Religious Anarchism" of Martin Buber, Ada Taggar-Cohen (ed.) *Proceedings of the Third International Symposium of the Jewish Studies "Judaism in Modern Era: Interpretative Studies of Ancient and Current Texts,"* Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions, Doshisha University, pp.84-94 2019年

小野 文生、「パティ・マトスという経験の思想の可能性 いま に向き合い、時間を変えるために」、『近代教育フォーラム』(教育思想史学会編)第27号、査読有、pp.74-85、2018年

Ono, Fumio, Philosophy in the Age of Globalization, But in Which Language? Translation, or Loving the Experience of Enduring Pathos, *Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan*, Vol. 2, 査読有、pp.207-227、2018年

小野 文生、「マルティン・ブーバー、非典型的思考の行方 没後50周年を記念して」、『京都ユダヤ思想』(京都ユダヤ思想学会)第7号、査読無、pp.86-125、2016年

西村 拓生・小野 文生、「研究討議に関する総括的報告(教育学的欲望としてのオルタナティブ 超越性をめぐって)」、『教育哲学研究』(教育哲学会)第113号、査読有、pp.21-29、2016年

小野 文生、「「論争としての啓蒙」に寄せて」、『京都ユダヤ思想』(京都ユダヤ思想学会)第5号、査読無、pp.63-65、2015年

### [学会発表](計28件)

小野 文生、「鶴見俊輔のプラグマティズム思想とユートピアとしての漫画的精神」、『滋賀大学経済学部ワークショップ《マンガ学ワークショップ》』、滋賀大学彦根キャンパス、2019年2月21日

小野 文生、招待講演「美と教育のかたちと かたちなきもの について 思想研究の視点から」、『日本美術教育学会京都支部研究会 17、白沙村荘・橋本関雪記念館(京都市)』、2018年11月10日

小野 文生、「生と社会をめぐる かたちと あいだの思想 ブーバーとジンメル」(「ゲオルク・ジンメル没後100年記念シンポジウム」)、京都ユダヤ思想学会第2回関東大会、慶応義塾大学日吉キャンパス、2018年10月27日

Ono, Fumio, "Freedom, Authority, and the Experience of the Pathos: A Response to Gert Biesta's "The Rediscovery of Teaching"" [International Symposium: "Rethinking Teaching: Toward the Reconstruction of (Philosophy of) Education"], The 61st Annual Meeting of the Japanese Society for the Philosophy of Education, Yamanashi-Gakuin Junior College, 2018年10月7日

小野 文生・下司 晶・生澤 繁樹・井谷 信彦・平田 仁胤・大塚 類・杉田 浩崇・奥井 遼、「次世代育成企画委員会ランチタイムセッション:教育哲学の境界を問う 教育哲

学は何を射程に含めうるか」、教育哲学会第 61 回大会、山梨学院短期大学、2018 年 10 月 6 日

小野 文生、「ひずみの底の未来イメージ 1968 年 5 月水俣 と鶴見俊輔のプラグマティズムから科学技術の政治性を問う」(課題研究「科学技術の政治性とプラグマティズム 現代社会における社会的探究の論理と倫理を問いなおす」)、日本デュイ学会第 62 回研究大会、名古屋大学、2018 年 9 月 24 日

Ono, Fumio, "Religious Anarchism and Bipolarity in the Thought of Martin Buber," The 3rd Symposium on Jewish Studies, The Hebrew University of Jerusalem/Israel, 2018 年 8 月 19 日

Ono, Fumio, "On the thought of pathei mathos and philosophy of education" [Symposium: Pathos and Philosophy of Education. For the Patho-logical Turn of Education], 16th International Network for Philosophers of Education Conference 2018, University of Haifa/Israel, 2018 年 8 月 16 日

小野 文生、「教育 / 人間形成とパトスの知 「人々の哀しみに感応」する「身もだえ」から教育を再考し、変革の力をえるために」(第 2 分科会「大学教職課程における研究と教育のはざま その本質と実務」)、全国私立大学教職課程協会第 38 回研究大会、酪農学園大学、2018 年 5 月 20 日

本田 由紀・小野 文生・青木 栄一・石川 良子・須田 将司・黒田 友紀・石井 英真・松岡 亮二、パネルディスカッション「査読に通る論文とは」+「論文指導ワークショップ」、日本教育学会「若手会員のための論文指導ワークショップ」、東京大学本郷キャンパス、2018 年 3 月 17 日

Wigger, Lothar, Uhrendorff, Uwe, Mattig, Ruprecht, Dalsky, David, Zehbe, Klaus (Facilitators) Nishihira, Tadashi, Rappleye, Jerermy, Hirose, Yuzo, Yamana, Jun & Ono, Fumio, Possibilities and limitations of qualitative methods in 'Bildungsforschung,' International Workshop on "Bildungsforschung" Kyoto University & TU Dortmund, Kyoto University, 2018 年 3 月 6 日

小野 文生、「教育 / 人間形成とパトスの知 「人々の哀しみに感応」する「身もだえ」から教育を再考し、変革の力をえるために」、京都地区私立大学教職課程研究連絡協議会 2017 年度研究大会(テーマ「大学教職課程における研究と教育のはざま その不易と流行」)、仏教大学紫野キャンパス、2018 年 2 月 22 日

小野 文生、「小杉世氏「マーシャル諸島をめぐる小説と詩にみるコロニアリズムと環境の問題」へのコメント」、2017 年度日本オセアニア学会関西地区例会、同志社大学、2018 年 1 月 20 日

小野 文生、「巻き込まれつつ対峙する知 じゃなかしゃば の思想のために」(ラウンドテーブル「教育哲学は 災害と厄災の記憶 にいかに向き合うのか 『災害と厄災の記憶を伝える』が提起しえたこと / しえなかつたこと」)、教育哲学会第 60 回大会、大阪大学吹田キャンパス、2017 年 10 月 15 日

下司 晶・小野 文生・生澤 繁樹・井谷 信彦・平田 仁胤・松浦 良充、「次世代育成企画委員会ランチタイムセッション『教育哲学研究』に投稿する前に 査読制度を通して「教育哲学研究とは何か」を考える」、教育哲学会第 60 回大会、大阪大学吹田キャンパス、2017 年 10 月 15 日

小野 文生、「パテイ・マトスという経験の思想の可能性 いま に向き合い、時間を変えるために」(シンポジウム「いま をどう読み解くか 教育に向き合うための歴史感覚を問う」)、教育思想史学会第 27 回大会、武庫川女子大学、2017 年 9 月 10 日

小野 文生、「敷居 / 閾をしきりつつ歩むこととしての自律、あるいは弁証法のパトス 藤井俊之『啓蒙と神話: アドルノにおける人間性の形象』(航思社、2017 年)へのコメント」、日本シェリング協会第 60 回シェリング・ゼミナール、大阪学院大学、2017 年 8 月 5 日

鶴飼 哲・伊藤 玄吾・王 柳蘭・宇佐見 耕一・尹 慧瑛・小野 文生、「G と R の結び方 グローバル地域文化学という挑戦」、同志社大学グローバル地域文化学会: 学部完成記念シンポジウム、同志社大学烏丸キャンパス、2017 年 7 月 19 日

小野 文生、「非在のエチカ の生起する場所 水俣の記憶誌のために」、公開研究会「災害と厄災の記憶は伝えられるか 教育学と哲学の間で考える」、同志社大学、2017 年 3 月 26 日

小野 文生、「哲学教育と教育哲学のあいだ 子どもの哲学との出会いから考える」(ラウンドテーブル「いま、なぜ「子どもの哲学」か 哲学的思考の刷新へ向けて」)、教育哲学会第 59 回大会、東京大学本郷キャンパス、2016 年 10 月 10 日

②1 Ono, Fumio, "The experience of the foreign, or stammering in one's own language: On the subject of philosophy in Tetsuro Watsuji's 1935 work "The Problem of Japanese Language and Philosophy," Ringvorlesung im Sommersemester 2016 an der Technischen Universität Dortmund: Bildung im fremden Sprachen?: Erziehungswissenschaftliche Perspektiven auf Sprachenlernen und Mehrsprachigkeit in der Globalisierung, Technische Universität Dortmund, Germany, 2016 年 6 月 7 日

②2 Ono, Fumio, "To become a Renaissance man in a literal sense. Buber and his way of

re-telling in Hasidic literature," 研究会「未来のハシディズム」(日本學術振興会助成研究「ユダヤ学史と原典資料の複合研究」&同志社大学一神教学際研究センター) 同志社大学、2015年10月3日

- ⑳小野 文生、「Encyclopaedia Judaica (2nd. Edition)項目紹介：Buber, Martin」, 京都ユダヤ思想学会夏季研究合宿、同志社びわこリトリートセンター、2015年9月15日
- ㉑小野 文生、「「経験を語ることの不/可能性」へのコメント」(コロキウム「経験を語ることの不/可能性 1920-30年代における新たな経験の模索」)、教育思想史学会第25回大会、慶應義塾大学、2015年9月13日
- ㉒小野 文生、「小手川正二郎『甦るレヴィナス 『全体性と無限』読解』へのコメント」, レヴィナス研究会「レヴィナス研究の現在 小手川正二郎『甦るレヴィナス 『全体性と無限』読解』とともに」, 京都大学、2015年8月7日
- ㉓小野 文生、「ブーバー、根源の脱構築と両極性の思想 「宗教的アナキズム」への註解」, 京都ユダヤ思想学会第8回学術大会、同志社大学、2015年6月21日
- ㉔小野 文生、基調講演：「マルティン・ブーバー、非典型的思考の行方 没後50周年を記念して」, 京都ユダヤ思想学会第8回学術大会、同志社大学、2015年6月20日
- ㉕Ono, Fumio, "On Buber's Messianic Dialectic: The Concept of Tragedy and Its Significance in his Hassidic Novel Gog veMagog," International Conference: Multiple Dialogues: Martin Buber in Palestine and Israel. On the Occasion of the 50th Anniversary of Martin Buber's Death. 50 Years of Israel and German Relations, the Van Leer Institute Jerusalem/Israel, 2015年5月10日

[図書](計6件)

- 小野 文生 他、『いま、教育と教育学を問い直す 教育哲学は何を究明し、何を展望するか』, 東信堂、担当箇所 pp.268-310、2019年
- Ono, Fumio et al., *Martin Buber. His Intellectual and Scholarly Legacy*, Brill Academic Publishers, 担当箇所 pp.258-272, 2018年
- Ono, Fumio et al., *Bildung in fremden Sprachen? Pädagogische Perspektiven auf globalisierte Mehrsprachigkeit*, transkript Verlag, 担当箇所 pp.235-256、2018年
- 小野 文生 他、『教職教養講座 第3巻 臨床教育学』, 協同出版、担当箇所 pp.203-228、2017年
- 小野 文生 他、『教育思想事典 増補改訂版』(教育思想史学会編) 勁草書房、担当箇所 p.8, pp.772-773、2017年
- 小野 文生 他、『災害と厄災の記憶を伝える 教育学は何ができるか』, 勁草書房、担当箇所 pp.31-69、2017年

[その他]

- 小野 文生、「世界の軋む音を聴く シンポジウム開催にあたって」(同志社大学グローバル地域文化学部完成記念シンポジウム「GとRの結び方 グローバル地域文化学部という挑戦」)、『GR 同志社大学グローバル地域文化学会紀要』第11号、pp.1-5、2018年10月
- 小野 文生、報告「教育哲学・思想史」部会(本田 由紀 他「若手会員のための論文指導ワークショップの記録」)、『教育学研究』(日本教育学会)85(3)、pp.116-118、2018年9月
- 小野 文生、「教育/人間形成とパトスの知 「人々の哀しみに感応」する「身もだえ」から教育を再考し、変革の力をえるために」, 『京都地区私立大学教職課程研究連絡協議会 会報』(第37号)、pp.19-27、2018年6月
- 小野 文生、「あの要約困難な、透明ならざる経験のために(特集「教育哲学者が考える」グローバル人材の育成)」, 『教育学術新聞』2721号(2018年3月28日) p.3、2018年3月
- 小野 文生、「もろい部分に立つために しなやかな根拠としての信・芯・真(特集「信・芯・真」)」, 『児童教育』(お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会編)28、pp.1-4、2018年2月
- 小野 文生、「ひとりで在ることの逆説からひらかれる世界」, 『チャペルアワー奨励集』(同志社大学キリスト教文化センター)297、pp.214-233、2018年1月
- 小野 文生 他、報告書『三人委員会水俣哲学塾』(一般財団法人水俣病センター相思社編) pp.61-63に発言が収録、2015年12月
- 小野 文生、「「棒くい」と「身もだえ」の闘いのために(教育哲学を考える)」, 『教育学研究』(教育哲学会)第112号、pp.230-231、2015年11月
- 小野 文生 & 渡名喜 庸哲、シリーズ戦後70年第4弾「哲学者はショアといかに向き合ったか アウシュヴィッツ収容所解放70周年」, 『週刊読書人』2015年8月7日号、2015年8月
- 小野 文生、「一人一人の想い方 水俣のおばあさんのことから同志社のことを考える(私の提言)」, 『同志社大学広報』, No.464 p.34、2015年7月

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。